

短期大学における産学連携オンライン授業の試み

村木 桂子・吉川 尚志・白川 はるひ・苗村 晶彦・中村 公子・高橋 佳子

総合教養センター

はじめに

2020年度は新型コロナウイルス感染症（COVID-19、以下、コロナ）感染拡大防止への対応として多くの大学ではオンライン授業が行われている¹。戸板女子短期大学でも前期のすべての科目がオンライン授業となった。開講前に短期大学主催のオンライン学習システム講習会に参加するなど、可能な限り対策を講じて臨んだ授業であったが、ほとんどの教職員はZoom²やGoogle Classroom³といったツールを使ったことがなく、要領を得るまでに多くの時間を費やした。初のオンライン授業で試みてきたことを、1年が経過しようとしている今、まだ十分に省察できているとはいえない。

そこで、こうした試みを整理するために2020年度前期に「産学連携プロジェクト」⁴で行ったオンライン授業の実践報告を行う⁵。今後も継続的に行われる可能性のあるオンライン授業を学生、教員双方にとってより安定したものにするため、今回教員が試行錯誤を重ねて得た知見を整理し今後の授業の質の向上のための改善策を模索し、今後に生かすこと

を目的とする。

本稿では、I. で連携した企業から与えられたテーマと実施した授業スケジュールを紹介し、II. では今回の産学連携オンライン授業における教員側の気づきをまとめる。III. において学生が回答した「授業の振り返り」をもとに産学連携オンライン授業における学生側の気づきを整理して、IV. ではオンライン授業を行う際の改善案と留意点を提示し、今後のオンライン授業における課題について考察する。

I. 具体的な実施内容

以下にプレゼンテーション発表までの授業スケジュールと連携した企業から各学科に与えられたテーマを示す。

¹2020年4月の時点での文科省の大学等（短期大学を含む）の対応状況調査によれば「全体の約9割の大学等において、学生を集めて行う通常の授業の開始時期等を延期している。例年通りの時期に実施するとしている大学等でも、ほとんどが、遠隔授業の実施を決定又は検討している。」「授業の開始時期を延期」には、時期を延期した上で遠隔授業を実施する学校を含む。」とある。（文部科学省高等教育局高等教育企画課 令和2年4月24日発表より）

²カメラ（映像）と音声を使い、ネットを通じて遠隔地のユーザー間でコミュニケーションをとることのできるオンラインミーティングツールである。

³Googleが学校向けに開発した無料のオンラインサービスである。このサービスを利用すると、対面しなくても教員と学生間で課題を課したり提出したり、ファイルを共有することができる。

⁴戸板女子短期大学では2015年度の『港区芝地区養蜂事業』産官学連携を端緒として、初年次生必修の総合教養科目「戸板ゼミナール」において、企業とのコラボレーションによる「産学連携プロジェクト」を毎年実施している。職員が連携先企業を探し、交渉・調整を行い、さらに授業にも参加して学生支援等を行うという、教職協働によるプログラムである。地域社会の発展と企業の課題解決に貢献するため、短期大学生が日ごろの学びの成果を社会に生かすことを通して社会人基礎力を身につけることを目指している。

⁵本稿において企業名等の敬称は省略し、敬意表現は用いない。

1. 3学科の授業スケジュール（全10回）

〈図表1〉 3学科の産学連携オンライン授業スケジュール

		各学科の学生数、グループワークのグループ数と 担当教職員数 （●印は企業参加の日）		
3学科の授業内容		服飾芸術科 担当教職員 4名 (194名、36グループ)	食物栄養科 担当教職員 5名 (156名、30グループ)	国際コミュニケーション学科 担当教職員 5名 (129名、26グループ)
① 5/14	産学連携とは テーマ発表、動画&PPTによる資料 提供			
② 5/21	企業からの企画説明 個人ワーク（個人案作成）	●企業の Zoom 参加 企画説明、質問対応、 アドバイス	●企業の Zoom 参加 企画説明、選手からの 応援メッセージ動画、 質問対応、アドバイス	●企業の Zoom 参加 企画説明、質問対応、 アドバイス
③ 5/28	グループワーク開始（各自の提案発 表）、質問対応・アドバイス			
④ 6/4	グループ内討議 （調べもの、案をまとめる）			●企業の Zoom 参加 参考プレゼンテーション
⑤ 6/11	グループ内討議 （企画の再検討、まとめ。PowerPoint の作成）			●企業の Zoom 参加 質問対応・アドバイス
⑥ 6/18	グループ内討議 （PowerPoint の作成）	●企業の Zoom 参加、 質問対応、アドバイス	●企業の Zoom 参加、 質問対応、アドバイス	●企業の Zoom 参加 質問対応・アドバイス
⑦ 6/25	グループ内討議 （PowerPoint の完成、発表原稿作成、 1分プレゼンの練習、評価表（ルー ブリック）説明、プレゼン資料最終 チェック） →提案資料提出	選考開始	選考開始	選考開始
⑧ 7/2	予選プレゼンテーション （全員）	●企業の Zoom 参加、 審査 質疑応答、評価コメント	●企業の Zoom 参加、 審査 質疑応答、評価コメント	
⑨ 7/9	決勝進出チーム発表、発表準備			
⑩ 7/16	決勝プレゼンテーション	●企業の Zoom 参加、 審査、質疑応答、 結果発表コメント	●企業の Zoom 参加、 審査、質疑応答、 評価コメント ⁶	●企業の Zoom 参加、 審査、質疑応答、 結果発表コメント

⁶食物栄養科はこの後7/30に決勝戦結果発表の日を設け、企業が動画参加で講評を行っている。

2. 各科のプレゼンテーションテーマ

(1) 服飾芸術科

連携企業である株式会社横浜フリエスポーツクラブ（以下、横浜 FC）からのテーマは、Jリーグの試合会場で開催するイベントを通してファン、サポーターを獲得できるように、サッカーの嗜好にかかわらずスタジアムに足を運びたくなるイベントのコンセプトと場外ブースの内容を提案するというものであった。さらに具体的条件として以下が提示された。

- ①女性がイベントだけでも行きたいと思う企画であること
- ②来場した方が体験できる企画であること
- ③試合前の2、3時間で実施できる企画であること
- ④実際のイベント開催時期は9月～12月と考える企画を考えること

(2) 食物栄養科

食物栄養科には、横浜 FC より「インスタ映えるスタジアムグルメ」というテーマが提示された。現在、横浜 FC はJリーグの中でサポーターの女性比率が低いチームであることが問題となっており、その問題解決に向けた取り組みのひとつであった。最終目的は入賞したスタジアムグルメを実際に三ツ沢競技場にて販売することである。

(3) 国際コミュニケーション学科

株式会社ジェクトワン（以下、「ジェクトワン」）から示されたテーマは、「社会問題となっている「空き家」を活用した新名所をプロデュースする：芝地区ならではの「情報発信スポット」を創造する」というものであった。企画を考えるにあたっての最重要ポイントは利用者、物件所有者、運営者の3者すべてにメリットがもたらされることであり、以下の項目を踏まえて解決策を探っていくよう、取り組みに向けた方向性が示された。

- ①ターゲットとその属性（年代・性別・暮らし方・エリアなどの特性）
- ②企画コンセプト及び具体的な実施内容
- ③提案した業界についての動向やトレンド
- ④企画の実施により利用者、物件所有者、運営者のそれぞれが得られるメリット

- ⑤オープンまでのスケジュール、予算・月次収支のシミュレーション

II. 今回のオンライン授業における教員側の気づき

上記のようなスケジュールで、産学連携の授業は各学科ともグループワークで行った。対面授業で実施していた当初からこのスタイルをとっており、前期の早い時期にグループワークをすることで学科の学生間の相互理解を図ることもねらいの一つとしている。1グループ6名程度のグループを教員側が任意に作り、学生はほとんどお互いが初対面の状況で与えられたテーマに取り組む、コミュニケーション力や協働性も育む授業である。今年度はこのグループワークをZoomで行うことになった。

教員は無意識のうちにこれまでの対面の感覚で授業に臨んでしまうのだが、オンラインだからこそ新たに必要な準備がある。未経験のため想像が及ばなかったり、またパソコン操作に慣れないうちはスムーズに授業内容に入れなかったりすることもあった。今回のオンライン授業では教職員は短期大学から自宅にいる学生へ配信を行った。通常対面授業とは異なり機材準備があるため最低でも30分前には教室に入る必要があること、教職員は一つの教室内でもなるべく距離をおいてパソコン操作しなければ音声障害が起り学生に聞き取りにくくなること、授業準備段階ではネット上で見やすい資料作りを工夫する必要があることなど、オンライン授業ならではの準備が必要であるということに、筆者ら教員は試行錯誤のうちに気がついていった。ここでは今回のオンライン授業を経験したなかでも、とくに印象深かった3点について述べることにする。

1. オンライン上でのグループ分けの気づき

オンライン授業は慣れるまでに、授業に入る前の機器操作でつまづくことが多い。Zoomでグループワークをしようとすると「ブレイクアウトルーム」¹という機能を使うことになる。教員はまずその設定をするところから工夫が必要だったが、とくに3学科のうち一番学生数の多い服飾芸術科（学生数194名）ではその点で一番苦労した。これはグループでひとつの企画案を作成しプレゼンテーションすると

いう産学連携授業の性格上、グループワーク 5 回（5/28、6/4、6/11、6/18、6/25）ともすべて同じメンバーでのグループ作りをオンライン上で行わなければならないために起きた問題である。

今回はコロナ感染拡大防止対策により入学前教育が中止となったため、本来入学前教育で活動するはずだった 6～7 名のグループを産学連携の授業で活用することになった。筆者ら教員は「事前振り分け」の方法を学ぶところから始めるという「ブレイクアウトルーム」初心者であったため、「ルーム名」が長くなると画面上には「グループワーク○○○○」という同じ表示しか見えなくなるので短いルーム名にした方が良いということや、事前振り分けを学生名で作成しても実際の振り分けは Zoom 入室時のメールアドレスで行われるので、Zoom に登録済みの学生がサインインして入室する場合以外は事前振り分けルームに学生が組み込まれない、などの仕組みは、機能を使って初めてわかったことであった。

その後もグループワーク準備のための事前振り分け作業に毎回かなりの時間を費やすこととなった。そこで、授業開始後すぐにグループワークを行うことは避け、振り分け作業に要する時間を念頭に置き、その回の授業内容に関する注意事項や手引きなどを教員 1 名が説明し、その間にもう 1 名の教員が振り分け作業を行うという役割分担を行うことで対応した。

今後に向けての改善案は、グループ作りを学籍番号順に行っておくことである。番号順であれば、遅刻者も含め受講者全員が授業に参加してからグループ分け作業を行っても短い所要時間で済むため、授業内容に支障をきたすこともないからである。

本学の場合、学籍番号が近い学生同士だけ、という固定化した友人関係を築く傾向があり、産学連携の授業では、例年それを避ける形でグループ分けを行ってきた。学籍番号順のグループ作りとなると、そのねらいから外れることになるが、Zoom を利用したオンライン授業が他の科目でも実施されている今年度は、むしろ機器に任せランダムなグループ分けを行っている授業が他にもある可能性が高いた

め、学籍番号をシャッフルしたグループ作りにこだわる必要はないだろう。

2. Zoom の「ブレイクアウトルーム」における気づき

対面授業であれば教室を巡回するだけで容易に気づくことのできることもある。たとえば与えられたテーマが把握しきれていない学生、グループの中で自分の役割がわかっていない学生など、教室を回ればだいたいの活動が把握でき、教員は適宜学生にアドバイスができる。

しかしオンラインの授業では「ブレイクアウトルーム」で個々のグループに分かれた後は、教員は部屋に取り残されたような状態になり、各グループの学生の詳細は一切見えなくなる。通信環境の良くない学生は教員の知らないうちに Zoom から退出せざるを得なくなることもあり、全体の状況が把握できない教員としては、学生がグループワークを順調に行うことができているかどうか心配になる。全体で 15 回ある「戸板ゼミナール」の 10 回分を使う産学連携の授業のうち、各学科とも第 3 回目からグループワークが始まったのだが、企業の参加は国際コミュニケーション学科では第 4 回の授業、服飾芸術科と食物栄養科は第 6 回の授業に予定されていたため、企業・学生お互いにとって授業を有意義なものにするためにも、グループワークの初回（5/28）から各学科の教職員は「ブレイクアウトルーム」に参加し、学生の進捗状況をチェックすることにした。

教職員で担当するグループを決め「ブレイクアウトルーム」に 1 グループずつ短時間参加したのだが、対面での学生の触れ合いと異なり、静かに傍聴するようなかたちで入ることができない。お互いに正面を向いた状態で自分の様子が教員、またグループメンバー全員から「見られている」状態になるため、自ずと受け答えも緊張感を伴ったものとなる。そして黙ったまましているといつまでも教員やメンバーからの視線を浴びることになるので、学生は何かしら反応せねばならなくなる。

¹Zoom 上で、授業に参加している学生を小グループに分けることができる機能である。教員は授業で学生にペア・ワークやグループワークをさせたいときに使用する。

また対面とは違い、グループワークを行っている最中に、グループ内の2、3人で別のテーマで勝手に話すことはZoom上では困難である。もし行えば、他のメンバーに嫌な感じを与えることになるだろう。全員が授業内容について話すか、あるいは全員が雑談するか、どちらにしてもグループで1つのテーマについて話す雰囲気になるので、全体的にみると比較的集中した話し合いができていたようである。

さらに、対面授業であれば、グループワークではどうしても一人あるいは数人に作業が集中しがちになり、6名1グループの場合、代表者の作業が終わるまで、他のメンバーは暇を持って余している様子が見られたものだったが、その点Zoom上では「画面共有」機能を使い、全員で同じ資料を見ながら双方向コミュニケーションをとりつつ作業ができる。そのため、グループメンバー全員が一つになって参加する、という環境が自然と整ったようだった。

ただ、教員がひとつの「ブレイクアウトルーム」のグループに入ってしまうと、他のグループの様子が全く分からない、「ヘルプを求める」⁸を押されても気づかないなど、複数の状況を同時に把握することが難しい状態が生じる。対面授業であれば一つのグループの相談に乗りつつ他のグループの動きや学生の表情などにアンテナを張り、それとなく教室全体を見渡して様子を把握することができるのに比べ、オンライン上の授業では部分と全体を同時に把握することが困難であることを経験した。

3. Google フォーム⁹での学生の「感想」チェックにおける気づき

教員も「ブレイクアウトルーム」に参加したが対面授業ほど学生を支援することはできず、グループワークが中心となるこの授業において、指導がうまく行えるかということが、教員側の懸念であった。そこで、限られた授業時間内で学生たちが目標を達

成できるよう、「今回の授業ではここまでできていることが目標」と、毎時間のはじめにその時間の目標を明確に提示し、毎授業終了後にGoogleフォームで「今回の作業内容」と「次回の授業で自分がすべきこと」、「授業の感想」を課題として提出させた。作業の進捗状況と全体のスケジュールを学生に自覚させるとともに産学連携の授業への意識を高め、教室状況を把握できない分の対応策としたためである。また、グループでの話し合いがスムーズに運ぶよう、各回のグループワークで進行役、タイムキーパー、書記などグループ内で役割分担をするよう指示し、その時間に各自が心がけたこと、次回心がけたいことを記述させることで、グループ作業は各自の心がけや行動が大切であることも意識させた。

こうして学生に書かせたものを授業ごとにチェックすると、学生の活動状況とともに心理状態の変化もうかがい知ることのできる記述がある。たとえばグループワークもはじめは何を話してよいかわからなかった状況から、3回目(6/18)以降「前回よりも発言できるようになった気がする」「だんだんリアルなイメージが湧き、さらに楽しくなってきた」というような感想が増え、徐々に話し合いが活発になり、それに伴いグループワークに参加することに楽しみを覚えるようになったことがうかがえる。ただ話しに参加するだけでなく、「グループのみんなと1人2個ずつ質問することにして、満足のできるように案をねった」などのように、話し合いの方法を自分たちで工夫する様子も見られた。

また、「企業の方が(「ブレイクアウトルーム」に入って)来てくださって質問できたおかげでより深く考えることができたので、来週もしっかり話し合いをしていきたい(※カッコ書きは筆者)」「企業からアドバイスをいただいたことで考えを改善したり、メリットになるプラスアルファのようなお言葉をいただけたので、今日のグループワークはとても濃いも

⁸Zoomから分割される「ブレイクアウトルーム」で「ヘルプを求める」をクリックすると、Zoomの主催者にサポートが必要であることが通知される。たとえば小グループに分かれていた学生が教員に対して支援を求める際には、このボタンを押せば「ブレイクアウトセッション1の◇◇がヘルプを求めました」と授業主催者である教員の画面上に表示され、「ブレイクアウトルームに参加する」を教員がクリックすればその学生◇◇のグループに参加できる。

⁹GoogleフォームはGoogleが提供している無料ツールで、オンライン上で課題を出したりアンケートをとったりした結果をExcelでチェックすることができる。

のになった」など、実社会で活躍する社会人の声を聞くことが刺激となり、次の段階のワークに対するモチベーションが向上している様子もうかがえる。

授業後の学生からのこうしたフィードバックをパソコン上でチェックすることは、筆者ら教員たちにとってはオンライン授業による初の経験であった。一方で、まだ一度も対面したことのない教員からの課題は学生としても緊張するのであろう、この課題提出をもって出席のカウントとすることもあったためか、ほとんどの学生が課題を提出していた。対面できない分、教員側も提出物から少しでも学生が発しているサインを見逃さないようにと心がけて授業ごとの感想を読むようにした。オンライン上では、たとえば不安そうな表情や迷っているような目の動きといった学生の様子が把握できないため、こうした授業後のフィードバックを丁寧に追うことは大切であろう。さらに、フィードバックだけで「学生の状態を把握できた」と過信することのないよう、オンライン上では対面時以上に留意せねばならないということもまた重要だと思われる。

Ⅲ. オンライン授業における学生側の気づき

前節ではオンライン授業を初めて経験した教員側の、重要に思われた3点についてまとめたが、本節では、授業すべてが終わった後に学生に課した「戸板ゼミナルに関する振り返り」¹⁰の記述をもとに学生側からの気づきを整理する。

「戸板ゼミナルに関する振り返り」では11項目¹¹を学生に問うたが、そのうちとくに本稿にかかわる3項目を取りあげる。単語レベルのものや抽象

的な記述ではなく、なぜそう考えるのか、理由をできるだけ詳しく書いてあるものについて、各学科の学生の書いたもの10ずつを提示する。なお、学生の記述のなかには日本語表現として不適切なものもあるが、ここではそのまま載せることにする。

授業でZoomの話し合いを行った際に学生が良かったと思ったことは、上記より、④「Zoom機能の良さを生かすことができた」、⑤「オンラインだからこそのコミュニケーションに良さを発見できた」、という2点にまとめられるだろう。

¹⁰学生にはあらかじめ以下のような断り書きをした。「この振り返りは「戸板ゼミナル」を履修後、指導する教員として知っておきたいデータならびに戸板ゼミナルに関する研究の資料としてのみ使用します。個人名が出ることは一切ありません。また、この回答が直接成績に関係することは一切ありませんので安心して記入してください。」そして、質問や心配がある学生は連絡をするようにと連絡先を明記したが、連絡はなかった。

¹¹11項目は以下のとおりである。1「産学連携に関する授業時間数は適切でしたか」、2「産学連携授業で企業の方に参加していただくことによって学べたことはなんですか」、3「Zoomでのグループワークに関して一番当てはまるものを選んでください（Zoomのほうが話しやすかった）（対面の方が話しやすかった）（どちらでもない）」、4「Zoomでの話し合いを行った際に、良かったと思ったこと（できるだけ具体的に）」、5「Zoomでの話し合いを行った際に、苦労したこと（できるだけ具体的に）」、「Zoomでの授業で教員に望むこと」、6「授業時間外でチームのメンバーとのやりとりをどの様に行いましたか（複数回答可）（Zoom）（LINE）（その他）」、7「この授業（戸板ゼミナル全て）の内容と説明は分かりやすかったですか」、8「質問等に対する対応は適切でしたか」、9「この授業のPowerPointや映像資料等は見やすかったですか」、10「この授業を受講して、この科目に満足していますか」、11「この授業について自由に書いてください」

1. 「Zoom での話し合いを行った際に、良かったと思ったこと（できるだけ具体的に）」

〈図表2〉 学生の振り返り回答（「Zoom での話し合いを行った際に、良かったと思ったこと」）

	服飾芸術科	食物栄養科	国際コミュニケーション学科
1	積極的に自分から話すことでグループでの会話を円滑に進めることができました。メンバーの方たちも、困っていることをしっかり伝えてくれて、Zoom上でみんなで解決案を考えることができたので良かったです。 授業ではありましたが、産学連携で④クラスの人と1番関われたとされていて、学校に通うことができなかつたため、すごく良い機会になりました。楽しかったです。	会っていないからこそ、自分の話し方や聞き方に気を付けることが出来ました。表情が分かりにくいからいつも以上に優しい言葉遣いをするように心掛け、参加できない子に気を配るなど周りを見る力が身につきました。⑤私ははっきりものを言うてしまうため、日頃の自分の言い方や聞き方を考え直し改善できるきっかけになりました。	⑥グループ全員が初対面であるにも関わらず、自分たちなりに打ち解け合うことができたことが最大の良い点だったと思います。全員が意見を出して、積極的であったためとてもスムーズに話し合いをすることができました。積極さが毎回の話し合いで少しずつよくなっていったのでとても良かったと思います。
2	②すぐに画像共有することができる。 ②みんなで一つの資料を編集することができる。 ②各々の責任感が強くなる。 ②zoomの使い方が上手くなる。	1人が話すとその人にスポットライトが当たり、話し合いがうまく進んだと思います。②話が脱線しないところです。	②画面を共有しながら話し合いができる、全員の表情を一気に見ることが出来る。
3	私は人見知りですが、⑤Zoomだからこそ積極的に話しかけなきゃという意識ができたので友人に話を振ったり自身が成長できたので良かったと思う。	人見知りからしたら⑥あまり緊張することなく話せる。 ②みんなの顔、画面が一気に見れる。	実際に会うことができない中、顔を出してグループで話すことによって仲良くなり②友達を作ることができた。
4	学校に行けず友人ができません。しかし②Zoomのグループワークがあるおかげで、友人を作ることができたので良かったと思います。	毎度同じグループで活動することでグループ内の人と仲良くなれました。 ②学校に行けない中友達ができてすごくよかったです。	学校に行けない分、皆とまだ話せていないですが、話し合いでの授業だと少し②相手のことを知れたり、仲が深まったりしたので良かった。
5	パワポを作る時に、私の画面を班の皆と共有して「1枚目はここにこれ入れよう、2枚目はこうしよう…」など②1つの画面を使って皆と考えることですごく分かりやすく作れたと思いました。作業がうまくいかなくても誰かに「誰か線の引き方知ってる？」ときいて知っている友だちがいればその友だちに「ここに枠をこう囲いたい」と矢印で説明もしたりして伝えることが出来ました。	⑥対面じゃないから焦りを感じて一人一人が行動できたこと。	⑥グループみんなが一人一人の話に耳を傾けみんなの意見を尊重できたこと。
6	Zoomでしか話せないために②連絡手段を作り、また、Zoomしようとなつて授業がないときにZoomをすることができた。 反応を顔で表現してくれるのでわかり易かった。⑥皆が前のめりで話しかけてくれて協力している感じが保っていて、共感してくれたり、全体的にプラス思考で取り組むことが出来たのが良かったです。	共有したいことをすぐに共有することができた。対面だと周りのグループがどんなことに取り組んでいるのかと、どうしても知ってしまう。②Zoomは、グループごとに部屋が切り分けられているのでそんなことがなく、しっかり自分達のメニュー開発に集中して取り組む事ができた。	Zoomでの話し合いでよかったと思ったことは、④授業外で話し合いをするときに、皆が持っているアプリだったので、授業外で活用することが出来たことです。

7	<p>①顔と名前が一緒に画面上に出るので、覚えやすかった。共有画面にできるので、説明等がしやすかった。</p>	<p>①みんなの表情が一度に見えるため誰一人置いていくことのない話し合いになったと思う。</p>	<p>①顔をみて話せるので話しやすかったです。顔いてくれたりしてくれて回数を重ねるごとに話しやすい雰囲気が出ていたなと思いました。</p>
8	<p>対面で会うのとは違う、コミュニケーションの取り方だったり話している人が被らない様に配慮だったり①お互いに思いやることができました。</p>	<p>みんなとの仲が深くなったり①自分のコミュニケーション力が試せるいい機会でした。</p>	<p>①画面ごとの話し合いはコミュニケーション能力が特に重視されることが分かり、私はチームを盛り上げるために積極的に意見を述べたり聞き出したりしました。①結果的に今の私は以前よりも話す力が身についたと思います。</p>
9	<p>①それぞれ家で空いている時間で話し合いができる。 ①ラインなどでは話し合いが進まず、やはり顔を見て話せるのは良かった。</p>	<p>①コメントや画面共有の機能を使うことで情報共有がしやすくなる。皆で空いた時間に話し合いや練習をすることが出来て良かった。</p>	<p>一人一人の意見をしっかり聞くことが出来たと思います。また、①調べた資料や作成したパワーポイントの資料を共有する時に画面共有機能を使用することによって、より細かく企画について考えることが出来たと思います。 ①Zoom はいつでもどこからでもできるので、時間が大丈夫な時に授業外でも話し合うことが出来たこともメリットだと感じます。</p>
10	<p>初めて話す子でも、Zoom だと対面よりも①気軽にみんな話せているような気がした。私自身もいつもよりも意見をたくさん出すことができたり、話し合いが円滑に進んだ。</p>	<p>他の班の声が聞こえないため、①自分の班の話し合いに集中することができた。</p>	<p>すぐに疑問に思ったことをインターネットで、調べられた事。 周りの声が聞こえないので、①自分たちの班の話し合いに集中することができたり、先生方や企業の方に質問が直接しやすく、その質問に対して班員全員が話を聞くことができる事。</p>

(1) ①「Zoom 機能の良さを生かすことができた」

1つ目の①「Zoom 機能の良さを生かすことができた」では、まず「学校に行けず友人ができません。しかし、Zoom のグループワークがあるおかげで友人を作ることができたので良かったと思います。」(服-4)¹²、「学校に行けない中友達ができてすごくよかったです。」(食-3)、「学校に行けない分、皆とまだ話せていないですが、話し合いでの授業だと少し相手のことを知れたり、仲が深まったりしたので良かった。」(国-4)のように、とくに今年度のコロナの影響が出ているものがあつた。「授業ではありましたが、産業連携でクラスの人と1番関わられたと思っていて、学校に通うことができなかつたため、すごく良い機会になりました。」(服-1)などからは登校できない制約の中、Zoom で顔を見なが

らクラスメイトと話すことができたことの嬉しさが伝わってくる。

また「みんなで一つの資料を編集することができる。」(服-2)、「話が脱線しないところです。」(食-2)、「画面を共有しながら話し合いができる、全員表情を一気に見ることが出来る。」(国-2)、「対面だと周りのグループがどんなことに取り組んでいるのかと、どうしても知ってしまう。Zoom は、グループごとに部屋が切り分けられているのでそんなことがなく、しっかり自分達のメニュー開発に集中して取り組む事ができた。」(食-6)のように、対面のグループワークと比較した際に、Zoom ならではの機能がグループワークに有効だと感じた学生がいたようだ。そして、こうした機能を毎回の授業で必要に迫られて使用するうちに「Zoom の使い方が

¹²(服-4)とは、直前の表中の、「横の軸：服飾芸術科、縦の軸：4」を意味する。以下同様に、(食-3)ならば「横の軸：食物栄養科、縦の軸：3」の内容を指し、(国-4)は「横の軸：国際コミュニケーション学科、縦の軸：4」を指す。

上手くなる。」(服-2)と、技術を身につけられることに言及している学生もあった。

登校ができないなか、学生たちはグループで1つの企画をPowerPoint資料を使いプレゼンテーション発表することが課されている。「授業外で話し合いをするときに、皆が持っているアプリだったので、授業外で活用することが出来たことです。」(国-6)、「Zoomはいつでもどこからでもできるので、時間が大丈夫な時に授業外でも話し合うことが出来たこともメリットだと感じます。」(国-9)、「Zoomでしか話せないために連絡手段を作り、また、Zoomしようとなって授業がないときにZoomをすることができた。」(服-6)のように、授業がない空き時間に自主的にZoomを利用して集まり、工夫して作業を進めた様子もうかがえる。

(2) ⑥「オンラインだからこそそのコミュニケーションに良さを発見できた」

2つ目の⑥「オンラインだからこそそのコミュニケーションに良さを発見できた」の例では、「私は人見知りですが、Zoomだからこそ積極的に話しかけなきゃという意識ができたので友人に話を振ったり自身が成長できたので良かったと思う。」(服-3)、「人見知りからしたらあまり緊張することなく話せる。」(食-3)、「初めて話す子でも、Zoomだと対面よりも気軽にみんな話せているような気がした。私自身もいつもよりも意見をたくさん出すことができたり、話し合いが円滑に進んだ。」(服-10)のように、もともとコミュニケーション構築に苦手意識を持つ学生でもZoomでのグループワークは対面時よりも抵抗が少なく感じられる感想がみられた。

また、以下の記述には対面ではない状況を意識し、その環境下でよりよい雰囲気を作り出そうとする学生の行動もうかがえる。「皆が前のめりで話しかけてくれて協力している感じが保っていて、共感してくれたり、全体的にプラス思考で取り組むことが出来たのが良かったです。」(服-6)、「頷いてくれたりしてくれて回数を重ねるごとに話しやすい雰囲気が出ていたなと思いました。」(国-7)、「自分のコミュニケーション力が試せるいい機会でした。」(食-8)、「画面ごしでの話し合いはコミュニケーション

能力が特に重視されることが分かり、(一中略)結果的に今の私は以前よりも話す力が身についたと思います。」(国-8)

これらはまさにこの授業目標の一つである「そのときどきの状況を理解し、適切な判断のもとに行動することができる。」(思考力・判断力の育成)にかなっているといえるだろう。学生自身が気づいているように、「お互いに思いやることができました。」(服-8)、「誰一人置いていくことのない話し合いになったと思う。」(食-7)、「グループみんなが一人一人の話に耳を傾けみんなの意見を尊重できたこと。」(国-5)このようなコミュニケーション上の配慮ができることが、グループワークにおいては何より重要なことだろう。オンラインになった時に、こうした配慮をどのような形にして表現するかが学生にとって課題になったようである。

このほか注目したい記述に以下のようなものがある。「(オンライン上での話し合いは)各々の責任感が強くなる。」(服-2)「対面じゃないから焦りを感じて一人一人が行動できたこと。」(食-5)こうした感想を読む前から、今年度のグループワークでは演習に参加しない学生が例年に比べ少なく、また、グループ内での人間関係のいざこざが少なく、筆者ら教員たちは感じていた。これは「対面でない」、オンライン上ならではの、やや緊張した雰囲気における学生間でのコミュニケーションの図りかたが、こうした形で表われたのではないかと推察される。

2. 「Zoom での話し合いを行った際に、苦労したこと（できるだけ具体的に）」

〈図表3〉 学生の振り返り回答（「Zoom での話し合いを行った際に、苦労したこと」）

	服飾芸術科	食物栄養科	国際コミュニケーション学科
1	◎一度も会ったことのないみんなと上手くコミュニケーションを取ることがまず戸惑いました。相手が思っていることがオンラインではあまり伝わらないので、◎表情を見てなにを考えているのか読み取るのに苦労しました。	◎1度も会ったことのない人たちといきなり話し合うという状況のため、最初の方はみんな遠慮がちになってしまっているように意見が出ず、話し合いが進まなかったこと。	◎まだ Zoom 上でしか会ったことない子達との話し合いなので相手の人柄も全くわからず、意見を言うということが難しかった。
2	家族と同居しているときに◎家族が映ってしまうことが嫌だった。部屋の状況などが分かってしまうのがプライベートがない感じがして嫌だった。	◎会ったことない人と実際に会わずにコミュニケーションをとることが大変だった。一言も話さずに終わった日があった。どうしても気を遣って、本音をあんまり言えなかったこと。	初対面なので最初の沈黙はつらいです。また◎グループワークになると元々友達の方だけが喋っている場合もあるのであまりやりたくないです。
3	④電波が悪くなったとき Zoom を抜けてもう一回戻った時どンドン話が進んでると中々話について行くのが大変だった。	④WiFi がきれてしまい、グループに戻るのに時間がかかりその間何が話されていたか分からないことがあった。	④電波が悪かったりした際に、話が遅れて聞こえたりしたこと。みんなの話し合いについていけなくなる時があること。
4	④電波が悪いと参加しにくいし、声も聞きづらいことです。◎グループセッションをしている時は特に他の子にも迷惑をかけてしまうのでとても申し訳ない気持ちになります。	◎話が脱線したときに穏便に話し合いに戻すことに苦労しました。いやな気持ちにさせずに、その話を中断してもらうように声をかけることが難しかったです。	まだ会ったことがない初対面の人と、共同作業を行わなくてはいけないのでコミュニケーションの取り方に苦労しました。◎Zoom での話し合いだと、一斉に話すと音声が飛んでしまうので、「いいね！」「私も同じこと思った！」など相槌を打ちづらかったです。
5	④最初はスマホで、途中からタブレットで参加したのですが、画面上に自分を含め4人しか出ないので、(自分にとっては) 端数の子たちの表情がスクロールしないと見れないのが辛かったです。パソコンのように上手いはずに戸惑いました。	④充電がすぐなくなるため、携帯が常に熱くなっていて壊れないか心配であった。携帯で配信して、操作もするため、Zoom から離れて入れなくなってしまうことがあった。	④スマートフォンで受講する事が多かったので、話す人しか顔が見えなく、班員全員の顔を見て話す事が出来なかったもので不安だった。
6	◎紙に書いたものを見せる時など、見づらいので LINE などですら送らないといけなかったり、少し手間がかかりました。	グループワークに行った時に◎誰が最初に喋るかみたいな感じで話し合いが一向に進まなかったこと	インターネットの不具合で話し合いに参加できない子がいたこと。パワーポイントの制作の時に、何回も写真を送っては訂正の繰り返しがあったので、◎一緒に集まることができたら、その場ですぐに完成できるのと思った。
7	インターネット状況によって会話が出来ない。◎みんなが探りながらの会話なので弾まない。会話に参加しない人が出てくる。	Zoom 時間外では話し合いはやりたくないと言われてしまい、悩んだ。無言になるとことん無言になり、話すきっかけを作る必要があった。自分がリーダーではないのに、前に出すぎているのではないかと悩んだ。◎外がうるさかったり、パソコンの調子が悪い子もいて話し合いが円滑に進まない時があった。	◎オンライン上なので相手の反応を汲み取る事が難しく、沈黙の時間が続いてしまったり、班員全員が会話に参加することが難しく、話し合いがうまく進まないこともあった。

8	①時差があるので話すタイミングが難しかった。時々被ったりして聞き取れなかったことがあったり、じゃんけんをする時は時差がとでもありうまく出来なかった。	話し出すタイミングがかぶるととても申し訳なくなった。なかなか③話を切り出すタイミングが対面よりもむずかしかった。	③電波が悪い子が1人いたりするだけで、話が進まなかったり、反応があまり表に出ずに分かりづらいので話しづらくなる。
9	④通信環境が悪いときはそもそも Zoom に入れなかったり突然落ちてしまったりする。会話の途中でときどき時差があり会話が止まってしまう。	④インターネットの環境が悪いとグダグダしたまま話し合いが終わる点。話すときに声がかぶったりしちゃう点。	④同じグループ内で二手に分かれたくてもできないのが大変でした。
10	⑤その場の雰囲気をつかむことが出来ないため、無言になってしまったら無言のままになってしまいました。人が近くにいれば話を切り出して良いタイミングを図ることが出来るのですが、Zoom だとそれが難しかったです。	⑤画面越しなので、大きさや色味を共有することがむずかしかった。電波の状態により、お互いの声が聞こえないことがあり、意思疎通に時間がかかることがあった。	電波は、悪い時は本当に困りました。それから、⑤周りの（他の班の）様子が伺えない点で、自分たちの班のスピードが遅いのか標準なのか分からず、話し合いも調整が効かないことがあった。

上の記述を整理すると、授業で Zoom の話し合いを行った際に学生が苦勞したと思ったことは、③「オンライン上で戸惑いを覚えたコミュニケーション」、④「通信環境がよくないことに起因する問題」という2点になるだろう。

(1) ③「オンライン上で戸惑いを覚えたコミュニケーション」

1つ目の③「オンライン上で戸惑いを覚えたコミュニケーション」では、初対面の相手と教員不在の場での話し合い、というシチュエーションに戸惑いを覚える学生があったようだ（服-1、食-1と2、国-1）。これは対面でも起こりうることであり、学生の経験の問題ともいえるかもしれない。ただ、やはり対面ではない Zoom 上での「初めまして」は、お互いの持つ雰囲気が伝わらない分、学生が述べている通り「探り合い」（服-7）となり「相手の反応を汲み取る事が難しく、沈黙の時間が続いてしまった」（国-7）、「誰が最初に喋るかみたいな感じで話し合いが一向に進まなかった」（食-6）、「話を切り出すタイミングが対面よりもむずかしかった。」（食-8）という状況になるのだろう。「会ったことない人と実際に会わずにコミュニケーションをとることが大変だった。一言も話さずに終わった日があった。どうしても気を遣って、本音をあんまり言えなかった」（食-2）を見ると、学生の繊細な気遣いが伝わってくる。

また、コミュニケーション配慮の面からみた場合、

他にも「グループセッションをしている時は特に他の子にも迷惑をかけてしまうのでとても申し訳ない気持ちになります。」（服-4）、「話が脱線したときに穏便に話し合いに戻すことに苦勞しました。いやな気持ちにさせずに、その話を中断してもらうように声をかけることが難しかったです。」（食-4）、「Zoom での話し合いだと、一斉に話すと音声か飛んでしまうので、「いいね!」「私も同じこと思った!」など相槌を打ちづらかったです。」（国-4）のように、相手に対して本来であればこうしたい（したくない）のにそれがオンラインだとうまくできない、といったオンラインならではの配慮の難しさがみて取れる。

このほかオンラインだからこそ困難なコミュニケーションとして「画面越しなので、大きさや色味を共有することがむずかしかった。」（食-10）というもの、そして「同じグループ内で二手に分かれたくてもできない」（国-9）というように、グループワークの中でさらに別れて作業をしたいという要求が学生側にあるということもわかった。

(2) ④「通信環境がよくないことに起因する問題」

2つ目の「④「通信環境がよくないことに起因する問題」では、「電波が悪くなったとき Zoom を抜けてもう一回戻った時どンドン話が進んでると中々話について行くのが大変だった。」（服-3）、「WiFi がきれてしまい、グループに戻るのに時間がかかりその間何が話されていたか分からないことがあった。」

(食-3)、「電波が悪かったりした際に、話が遅れて聞こえたりしたこと。みんなの話し合いについていけなくなる時があること。」(国-3)に見られるように、前期の授業開始直後、オンライン授業という初めての環境の中、使い慣れない機能に対する学生の焦燥感がうかがえる。

また、パソコンではなく、スマートフォンやタブレットで受講している学生の問題として、具体的に「最初はスマホで、途中からタブレットで参加したのですが、画面上に自分含め4人しか出ないので、(自分にとっては) 端数の子たちの表情がスクロー

ルしないと見れないのが辛かったです。パソコンのように上手くいかずに戸惑いました。」(服-5)「充電がすぐなくなるため、携帯が常に熱くなっている壊れないか心配であった。携帯で配信して、操作もするため、Zoomから離れて入れなくなってしまうことがあった。」(食-5)、「スマートフォンで受講する事が多かったので、話す人しか顔が見えなく、班員全員の顔を見て話す事が出来なかったので不安だった。」(国-5) 以上のような状況に学生が陥ることがわかった。

3. 「産学連携授業で企業の方に参加していただくことによって学べたことはなんですか」

(図表4) 学生の振り返り回答(「産学連携授業で企業の方に参加していただくことによって学べたことはなんですか」)

	服飾芸術科	食物栄養科	国際コミュニケーション学科
1	実際に企業の方に参加して頂くことで、 <u>◎会社では実際にどのようなことを考え、問題点やそれを解決するための解決方法など話し合っ</u> て企画をしているのかが感じることが出来たのでリアルな仕事を学ぶことが出来ました。	商品を考えていく上で見栄え、価格、栄養、手軽さ、時間など細かいところまで計算し考案することを学ぶことが出来ました。 <u>◎ただ単にこれを作りたい!のではなく、作った時にどのようなことが起きるのかを想定して考えることが重要だと学びました。</u>	学生のうちは周りと同じ行動をすることが基本だったが社会に出たら実現出来ることよりも新しい考えが目止まるということ。 <u>◎人と違う考えを持つ大切さを学べました。</u>
2	企業の方がどのようなことを目標にしているのかが分かったり、全く知らなかった企業のことを知ろうとすることで <u>◎今まで入ってこなかったようなニュースの内容も耳に入ってくるようになりました。</u>	商品を作るうえで、 <u>◎プロの方がどのような視点でものを見ているのかがわかりました。</u> 商品の味や見た目だけでなく、価格帯や買うお客様への配慮、どのような工夫があると購買意欲が上がるのか、プレゼンテーションで伝えたほうがいいことなど考えないといけない面はたくさんあることを学べました。	より具体的なお話や企業の方のプレゼンをきくことができたので、 <u>◎自分とどこが違うのか、お店を立てるだけでもこんなにも多くの事を決めるんだなという、普段の授業では学べないような事が学べました。</u>
3	企業のホームページに載っているような側面だけではなく、 <u>◎実際の仕事内容ややりがいなどの内面を知ることができてよかった。</u>	まだ学生の立場で右も左もわからなくてなんとかグループのみんなで仕上げたものを <u>◎本業の方に評価していただいて達成感がものすごく感じられました。</u>	大学の外のことを知ることができ、 <u>◎自分はまだなにも知らないんだなと思いました。</u>
4	学べたことは企画することの難しさ、楽しさです。ただだ案を出すだけではなく、現状の問題を解決するために <u>どのような事したらいいのか。この年代だったらどのような企画がいいのか。考えることが沢山でした。班の皆と一緒に悩んで案を出し合い、ほんとにこれでいいのか意見を言い合い、解決策を見つける。大変なことがいっぱいあったけれど、皆で協力できたことが楽しかったです。このように、◎企画することの難しさや楽しさをこの産学連携授業で学びました。</u>	商品開発によって必要である情報が消費者が知るよりもはるかに大変でした。価格を安くすれば消費者は増えますが、売上げが下がってたくさん作ることは難しくなります。いかにキャッチーで相手に残る商品を作ろうとしても予算をオーバーしてしまったり、エコをめざしたプラスチックを使わないことを意識しても商品に成り立たないなど、 <u>難しいことが多かったですが、◎少し視点を換えることで色々な考えが生まれ出せることがとても楽しかったです。</u>	企業の方のプレゼンは、無駄がなく、主張に根拠があり資料も素晴らしかったです。 <u>①あのように仕事が出来るようになりたいと思いました。</u> 企業の方々は、私たちの質問に丁寧に答えてくださいました。いつも笑顔で、質問をしやすい雰囲気を作って下さいました。敬語の使い方や雰囲気づくり、プレゼンなど参考になったことがたくさんありました。

短期大学における産学連携オンライン授業の試み

5	<p>実際に自分が体験した話を教えてくれることによって調べても出てこない情報が得られて①自分のこれからに生かせる内容がぎっしりと詰まっていることが学べられた。リアルなお金の話や、どのようにどんな努力をして就職出来たか、など。</p>	<p>実際に企業の方の意見を聞いて、②<u>実現性が大切だと学びました。</u>売るとなったら、どういふ所に力を入れればいいのか。商品販売を実現するためにどのようなことを考えればいいのか。を考えられるとより現実的になることを学びました。</p>	<p>まず、空き家を活用するという活動を知ることができました。そして、実際に企業の方と関わることで、課題に対する考え方や取り組み方が、⑧<u>インターンシップに参加しているように感じられてとても良かったと思います。</u></p>
6	<p>⑥<u>私たちからの目線と企業の目線は違うことを学んだ。</u>私たちは、学生目線からの価格と満足感を与えることのできる戸板マーケットを提案したが、企業はからすと誰でもできることだという判断をされる。周りと同じことをやってもいけないことを実感した。</p>	<p>決勝戦で企業の方からご意見とご質問をいただいたときに、0から考えたものを世に出すことは決して容易ではないことを学びました。決勝戦で企業の方からのお声を聞き、⑥<u>自分たちのただやりたいという思いだけでは完成させることはできないことに気が付きました。</u>実現させるためには、商品そのもの以外に、対象者、単価、効率性などまで多方面から検討を重ねることの大切さを学びました。</p>	<p>私は、企業の方に参加していただいたことで、⑥<u>実際の企業内でどのような視点で質問されたりするのか学ぶことが出来ました。</u>最終の発表で、企業の方が質問をされているのを聞いて、私が考えもしない視点からご質問をされていて、着目点がすごいなと感じたのを覚えています。そういったことから、どのような質問が来てもしっかり答えられる力も必要だと学ぶことが出来ました。</p>
7	<p>直接お話を聞くことで、実際の企画とかもイメージ湧いたり、計画立てやすくなると感じました。⑥<u>自分たちではこれが良いと思っても、企業からしたらまた違う見方があることを知りました。</u></p>	<p>⑥<u>自分の作りたい商品を提案するのではなく、消費者が求める商品を提案することが大切だと学べた。</u>また、実現性のあるものを提案することが大切だと分かった。提案するときは、具体的な内容まで考え、質問に対応できるようにしっかりと準備することが大切だと分かりました。</p>	<p>産学連携授業で初めて企業の方と関わって、すごく緊張しました。社会人になって働くことと責任感が大事になってくることを学べたと思います。④<u>一人一人が責任をもって仕事をして、初めて一つの企画が成り立っていることが分かりました。</u></p>
8	<p>⑧<u>実際に企業の方にプレゼンを聞いてもらって採用を決めてもらうことによって、自分が一つの仕事をしているような気分を味わうことができました。</u>企画内容では来る側（顧客）が素敵だと思える企画を考えるのはもちろん、企業側も得するという点と点をプレゼンする事で採用に近づけるということを学べました。企業の方の感想を聞いた時、情報をしっかり調べた上での根拠があることやリアルで想像しやすい企画が採用のポイントだとわかりました。</p>	<p>未熟な私達に今、自分たちが目指している職場で働いている方々に色々なアドバイスを頂けたことによって、そのように働く為にな何をすべきかや何が大切なのかと知ることができたところです。また、先生以外の方の話も聞くことで更に、①<u>自分で何かをやってみようという挑戦したい気持ちも生まれてきました。</u>私は外部の企業の方々が参加して下さったおかげで、①<u>将来についても幅広く考え直すことが出来たところがとても嬉しかったいい学びになりました。</u></p>	<p>このような機会を設けて下さったおかげで、⑧<u>まるで自分が本当に企業で働く一人のように自由に発想を広げることができました。</u>ジュクトワンさんの企業理念や仕事内容はもちろん、計画を進めるにあたって大事にしていることをとても感じて、私自身も計画を進める際にそのことを頭に入れながら活動できました。そして「こんな意図があってここにこの建物があるんだ」「企業側にはこんな思いが込められているんだ」など今まで企業側に立って考えることがなかったのですが、それから視点を変えて考えてみるが多くなりました。</p>
9	<p>企業の方に参加してもらって、より⑥<u>自分たちには解決できないこともあるんだと感じました。</u>実際にその企業の関係者だと見えていなかった部分をわたしたち目線で見ることが出来たのではないかと思います。自分たちで1から企画することが本当に大変で、そしてまだ会ったこともない子たちとやるのは意見を言うことにも抵抗があり大変でしたが、ここまでできたのは産学連携の授業でグループをつくり協力したからだと思います。もしかしたらという気持ちでも考えてみる事が大切なんだということも学ぶことができました。</p>	<p>ただバランスが良くても見た目も美しいものを求めているのではなく、⑥<u>他のお店が売っているものも視野に入れて商品を作ることや、コストや提供時間などすべての項目を深く掘り下げて考えないと商品化は難しくなってしまう</u>ということを企業の方の意見を聞いて感じた。また、プレゼンテーションの方法も単純な商品の説明ではなく、見えて面白いかつ商品に関しての内容もしっかりしているという常に新しいプレゼンテーションをした方が印象に残りやすいということも学んだ。</p>	<p>実際に企業で働くようになると、自身で新たなアイデアを考え出して紹介することができるようになる必要があるのだと思いました。④<u>社会人に求められるプレゼン力や話し合いのときのコミュニケーションスキルを今のうちに身につける必要もあると分かりました。</u></p>

10	<p>どんな企画が求められているのかが少し掴めた気がします。学校の服飾学科を生かした③私たちにしかできないことで、なおかつ多くのお客さんにも楽しんで貰えそうな企画が決勝に残っていて私たちのグループには服飾学科だからこそできることが足りなかったように感じました。そして企画の難しさも知りました。直接会わずにそれぞれ案をまとめることも、皆で考えて1つの案にして最後までどうしたら良くなるのかを考えるのが思っていた以上に難しかったです。⑩企画をしている社会人の人たちはすごいことをしているのだと改めて知ることが出来ました。</p>	<p>常にお客様のことを第一に考えているんだなということです。どのようにしたら食べやすいのか、手に取ってもらえるのかなどは勿論、③食べたあとなど先のことまで考えて作っていません。④自分だったらそこまで頭が回らなかったと思うので、とても勉強になりました。①これから栄養士として食に関わっていく中で、食べる方への配慮を怠らずにしていきたいです。</p>	<p>⑧企業の方と手を組んで自分たちの考えを実現させることができるかもしれないというワクワク感、グループのメンバーとも仲良くそして学校に行けない中でのZoomでの対面は最初は戸惑いも多かったけど助け合ってみなでできてよかった。企画することの大変さ、アイデアやお金関係いろいろな面のことを今回の産学連携で学べました！</p>
----	--	--	---

以上の記述から、とくに産学連携授業で企業の参加によって学生が学べたと感じていることの傾向を、③「多層的な視点を持つことの重要性」、④「将来について考え、今後の学生生活の過ごし方への意識変化」、⑤「自分の学びが実社会とつながっているという高揚感」、⑩「社会人という立場の責任の重さ」、の4つに整理できるだろう。

⑧などは、いかにも「産学連携」らしい授業で学生が抱く特徴的な感じ方であろうが、実は、他の③、④、⑩も、産学連携授業を含む「戸板ゼミナール」そのものの授業目標と重っている。「戸板ゼミナール」では、主体性・チームワーク・責任感の育成を、社会に出てから必要とされる実践力の基礎として不可欠な目標として位置づけている。今回、学生自身がグループワークを通してこれらのことに気づいているということは、産学連携の授業が産業界で働く人材の基礎力を養成するための内容として一定の条件を満たしていたと考えてよいのではないだろうか。

IV. 今後オンライン授業を行う際の改善案と留意点

オンライン授業直後は、教員側は手ごたえとして「うまくいった」と思っていた。しかし改めてこうして学生の感想を整理し、教員側の気づきと学生側の気づきを確認すると、両者のオンライン授業に対する受け止め方には、ずれがあることがわかった。

ひとつは、教員側の“良かれと思って”いた関与のしかたについてである。たとえば今回、第8回目の授業で学生全員のプレゼンテーション（予選）が行われたとき、一番学生数の多い服飾芸術科では、教員の人数に限りがあることから各ブレイクアートルーム内での進行役を学生に任せ、「ファシリテーター」「タイムキーパー」の役割を与えて実施した。前年度までの産学連携プレゼンテーションではこの回の授業は教員主導で行っていたため、初のオンライン授業で教室全体の状況が把握できない教員としては、学生主体でグループワークを支障なく行うことができるのか心配であった。「なかなか始められないグループがあるのではないか」「途中でプレゼンが止まってしまうのではないか」「時間をオーバーし授業時間内に全員のプレゼンが終わらないのではないか」等々不安は尽きなかったが、実際には全てのグループが問題なく授業内に発表を終えることができた。さらに、通信状況が不安定でZoomから抜けてしまうクラスメイトに対しては、臨機応変に発表を最後へ回すなど学生同士で対応していたことがわかった。

「ナチュラルアプローチ」¹³ という教授法の仮説の一つに、「i+1」というものがあるが、まさに今回のような状況だろう。もし例年のように「学生がプレゼンテーションに集中できるように」と教員側が進行役等すべてを担い、学生にある程度の役割を

¹³クラッシュェン（アメリカ、言語学者、Stephen Krashen：1941～）による教授法。第二言語習得に関する5つの仮説の一つであるインプット仮説による。自分が既に習得しているレベルを「i」とし、それよりもほんの少し高いレベル「+1」に触れると、有効な習得につながるというもの。

任せなければ、今回こうした学生の臨機応変な行動は起きなかったかもしれない。改善案として、今後学生を信じて任せる機会を増やすことにより、学生の自主性を引き出す可能性を探るということが、今回オンライン授業の必要に迫られた状況によって気づかされたことの一つである。

もう一つ、これは留意点だが、オンラインでグループワークの緊張感が薄れる学生がいるその一方で、画面に映ることを苦しいと感じる学生もあることを忘れないようにする、ということである。対面授業が少なく、学生同士が交友関係を広げにくい今年度のような場合、「学校に行けないなかで Zoom を利用することにより、友達ができてよかった」「一番良かったことは友人ができたことだ」というオンライン授業後の感想を読み、教員が“良かれと思って” Zoom の「ブレイクアウトルーム」を多用することがある。しかしその場合には、今回のフィードバックに見られた「家族と同居しているときに家族が映ってしまうことが嫌だった」、「部屋の状況などが分かってしまうのがプライベートがない感じがして嫌だった」、「グループワークになると元々友達の方だけが喋っている場合もあるのであまりやりたくないです」のように、「ブレイクアウトルーム」でのワークに負荷がかかる学生がいることも心に留めておきたい。

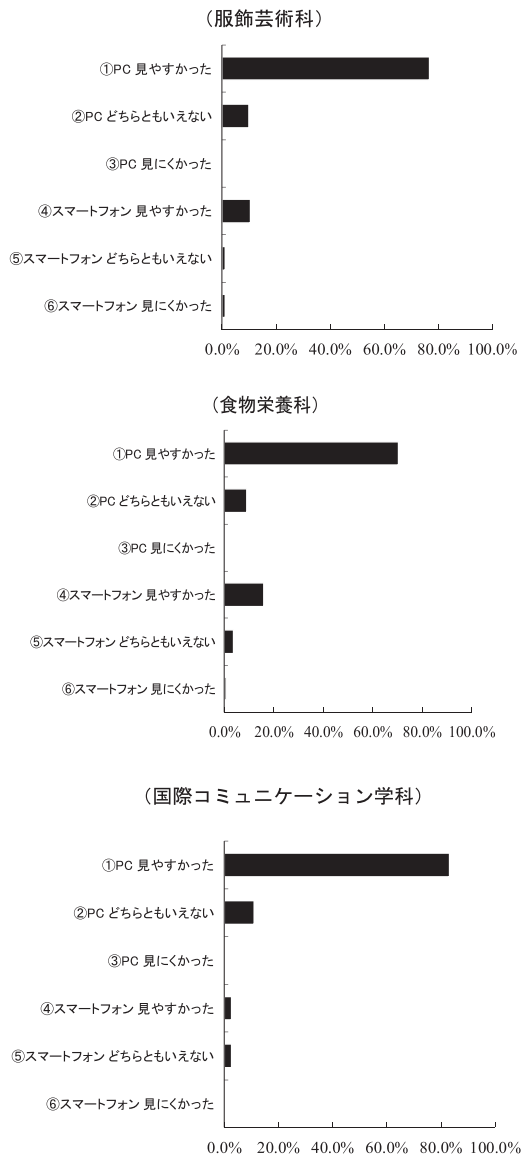
オンライン授業について、教員と学生の受け止め方に齟齬をきたした以上の理由を振り返ってみたとき、フィードバックとしての学生の「授業感想」を読む際に、教員は、こちらのねらい通りに応えているものについて目が行く傾向があることに思いあたる。反対に、こちらの意図を誤解しているものには「説明をきちんと聞いていないほうが悪い」「的外れな意見である」とみなして処理してしまいがちである。また教員がすぐ次の授業に準備をせねばならない場合、学生の感想を丹念にチェックする余裕がないのも実情である。教員はこうした対面とはまた違った、オンラインならではの意思疎通の特性をよく認識したうえで、授業を行う必要があるだろう。

さらに、オンライン授業では使用機器の違いによる教員、学生間の認識のずれも生じた。オンライン授業の場合、スマートフォンやタブレットから Zoom に参加する学生も多いが、それがどの程度の割合な

のか、筆者ら教員は授業前に確認を行わなかった。

今回、産学連携授業が終了してから回収したフィードバック「戸板ゼミナールに関する振り返り」によれば、学生の受講時の使用機器は、以下のようにパソコン使用率が高く、スマートフォン使用率は3学科とも低いことがわかった〈図表5〉。

〈図表5〉学生の振り返り回答（「この授業の PowerPoint や映像資料等は見やすかったですか（主な視聴環境が PC の学生は①～③、スマートフォンの学生は④～⑥の中から1つ選んでください）」）



オンラインでプレゼンテーションを行う場合、スマートフォンを使ってパワーポイントの画面共有をする学生が出てくる。スマートフォンでの画面共有に筆者ら教員は慣れておらず、今回の授業では苦戦することとなった。

改善案の二つ目として、オンライン授業ではまず授業前に学生の使用機器を確認し、そのうえで教員はそれらの機器の扱い方を授業のなかで説明することができれば理想的だろう。その際、対面でない説明は口頭やハンドアウトの配布だけではわかりづらいため、解説動画の情報を紹介するなど、学生ができるだけ独力で対処できるような情報を提供することが望ましいと思われる。

教員の多くはパソコンでオンライン授業を行うため、どうしてもパソコンでの作業を前提に話を進めてしまう傾向があるが、オンラインの授業準備段階では授業内容のほかに、こうしたスマートフォンやタブレットで参加している学生の画面の見え方や作業方法などの機器関連の準備にも時間を割く必要があると感じた。

おわりに

「我々が見えている、と思っていることは、実は見えていない」ということを、今回の授業の振り返りで痛感した。研究室や書斎において言葉だけで考えるのではなく、現場へ出向き、そこで問題を感じ取ることは、現実を見ることはもちろん、目に見えないものまでを感じ取ることにあるのではないか。初年次生必修の、この「戸板ゼミナール」という産学連携や初年次教育プログラムを含む授業では特に、「目に見えないこと」イコール「存在しないこと」ではなく、目に見えて現れにくいデリケートな問題（学生の不安や迷い）を教室内で感じ取り、学生の指導や支援に生かすよう心がけている。しかし、今回確認できたことは「オンライン授業に対する受け止め方は、教員、学生間でずれがある」ということであった。技術的には対面授業と違和感のない授業が成立したかのように見えたとしても、そこにはオンライン授業だからこその学生との意思疎通の難しさが隠されているということを教員はよく認識すべきであろう。

今回の産学連携の授業ではグループワークを通して、学生自ら主体性・チームワーク・責任感の重要性に気づいたということがあった。Ⅲ. で述べたように、この授業が産業界で働く人材の基礎力養成に資する内容であることが確認されたが、この先の課題は、今回確認できたことの一つである「学生の自主性を引き出す教育の可能性を探ること」、すなわち「いかに主体的な学びにつながる仕組みを、教員が用意できるか」にかかってくるといってもよいだろう。学生たちが自分らしく、自分の持っている可能性を開花させることができるような活動を、この1年生の前期に配置された授業で経験できるとすれば、その後の学生生活にも良い影響をもたらすのではないだろうか。学生たちの興味を引き出し、主体的な行動を育むことが期待できるような産学連携プログラムを、今後も試行してゆきたい。

参考文献

- 井上亘（2020）「人文系オンライン授業の開発ーリモート「アクティヴ・ラーニング」の可能性ー」教育研究実践報告誌、第4巻第1号 pp.35-42
- 「教育の新しい可能性 遠隔授業推進の茨城大」毎日新聞2020年7月23日 地方版（茨城県）
- 文部科学省高等教育局高等教育企画課「新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について（令和2年4月23日）」文部科学省ホームページ https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_kouhou01-000004520_10.pdf（2020年12月25日閲覧）
- 山本敏幸、岩崎千晶、柴田一（2020）「関西大学のオンラインを活用した授業の取組みと課題」大学教育と情報、No.1（令和2年6月1日）pp.2-10